

”世知原っ子に「夢」と「笑顔」と「達成感」を”

夢をもち、心豊かで、たくましく生きる子どもを育成する



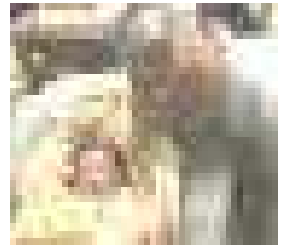
開知

○笑顔いっぱい
○学びいっぱい
○元気いっぱい

世知原小だより第33号 平成30年11月13日 文責 久保 克則

祖父になって改めて思うこと

私事で大変申し訳ありませんが、一読していただければ幸いです。以前の学校だよりで、初孫が生まれたことをお知らせしました。あっという間に1か月が過ぎました。おかげさまで順調に育っています。娘をとおして、自分の命を引き継いで生まれてきたことに、命のつながりの神秘さを感じました。そういう思いが強くなってくるにしたがって、私の祖母のことを思い出すようになりました。



私の父方の祖母は、柚木小学校の真向かいの家に住んでいました。早くに祖父が亡くなってしまい、女手一つで父と弟を育てました。小学校の管理員のような仕事や手作りの「鶏卵」という楕円の筒のような形をしたあんこの入った和菓子などを売って生計を立てていたようです。父と弟が結婚しても、柚木の家を離れずに一人で暮らしていました。茅葺き屋根の家だったのですが、かなり古くなったのと、一人暮らしにちょうどよい広さを考えて、父が新しい家を建てました。ただ、家には電気は通っていましたが、水道とガスは引かれていませんでした。



今から50年ほど前、小学校に入学した私は、日曜日によく母親に連れられて、大野の家からかやぶき屋根の家の頃からの祖母の家まで、バスに乗って行っていました。乗り物が大好きだったので、行くのがうれしくてたまりませんでした。

家に着くと、祖母は必ず「鶏卵」を作ってくれていました。私は大好きで、すぐに□いっぱいにはおぼりました。今でも世界で一番おいしい和菓子だと思っています。一段落つくと、私の仕事が始まります。それは、バケツを持って隣の家の井戸に水をもらいに行くことでした。井戸はポンプ式だったので、簡単に操作することができ、



水を汲んでは台所のかまどの横にある水瓶に入れて、それがいっぱいになると、家の外にある五右衛門風呂に水を貯めていました。結構行き来しなければなりませんでした。楽しんでやっていました。



一通り仕事を終えると、祖母がどこか場所は忘れましたが、10円玉、5円玉、1円玉などの小銭が入ったビニル袋を取り出して「克則ちゃん、ありがとう」と言って、20円くれていました。当時3個つながって売られていた「チロルチョコレート」が10円だったので、私にとっては大金でした。うれしかったですが、こつこつ節約して貯めていたお金かもしれないと思うと、申し訳ないという気持ちもありました。

小学生の間、何度となく祖母の家に行っては、同じように水汲みのお手伝いをしましたが、楽しみでしたし、優しい祖母が大好きでした。しかし、そ祖母は、私が中学1年生の時、がんを患い亡くなりました。葬儀は家で執り行われましたが、雪が舞うとても寒い日だったことを今でも覚えています。

教員になった私の最初の赴任校は、偶然にも柚木小学校でした。6年3組の担任だった私が家庭訪問をした際に、出てこられた何人かのおばあちゃんたちに「シノさんのお孫さんねえ。」「おばあちゃんの鶏卵はおいしかったとよねえ。」などと懐かしく話をされ、結構有名人だったんだと思いました。おかげで私も有名人になり、地域のみなさんにかわいがっていただきました。これも、祖母が天国で見守ってくれていたからかもしれません。生活も豊かになり、贅沢をすることもありますが、祖母の慎ましい生活を見てきて、身の丈に合った生活をしようということを感じました。それを思いながら新米祖父の私は、天使のような寝顔をしている孫へ、これから何を伝えることができるのか、期待と不安が入り交じっているところです。